「風景利用策」に見る本多静六の自然風景の利用に対する考え方について

小川 徹¹・真田 純子²

¹正会員 中央コンサルタンツ株式会社 (〒451-0042 愛知県名古屋市西区那古野二丁目11番23号)

E-mail: t-ogawa@chuoh-c.co.jp

²正会員 徳島大学大学院 (〒770-8506 徳島県徳島市南常三島2-1)

E-mail: sanajun@ce.tokushima-u.ac.jp

国立公園などの自然風景地における利用と保護のバランスは、国立公園制度の開始前から現在に至るまで課題となっている。本研究では本多静六の風景利用策を取りあげ、風景利用策における個別の計画を整理した上で、本多自身が何を風景資源ととらえ、それを生かすためにどのような空間改変を考えていたのかを明らかにすることを目的とした。その結果、風景利用策の背後に4つの考え方があったこと、風景資源は、風景地全体のイメージ、風景地内部の眺め、その土地の特徴を良くあらわす植物や地形などのほか、本多自身が「こうあるべき」と思う理想像の場合もあったこと、しかしそれらを生かすための空間改変については相互に矛盾する部分もあったことを明らかにした。

Key Words : Seiroku Honda, landscape, tourism, modification of landscape

1. はじめに

(1) 背景および目的

現在、国立公園には「規制計画」と「施設計画」という二つの計画からなる公園計画が定められている。「規制計画」について、堀は、「自然風景地の計画としてバランスを欠いたものとなっている」と指摘している。

「本来の自然風景地計画は、風景保護や利用が自然保護と同様に盛り込まれていなければならない」が、実際には「自然保護に大きく偏り」、「また保護計画と利用計画の連携も弱い」と言うのである¹⁾。また、堀の調査²⁾によれば、国立公園成立期には制度設計の思想として自然風景が重視されていたが、公害対策基本法(1967年)の制定など自然環境について関心が集まるようになった1965年頃から実質的な保護対象が変化し運用上は現在のように「自然」の保護を重視するようになったということである。

国立公園成立期の保護と開発を扱った研究に目を向けると、村串仁三郎は「国立公園成立史の研究」において、史蹟名勝天然記念物保護の立場をとる自然保護派と、国民衛生の立場から公園的利用をとる本多静六や田村剛を中心とする開発・利用派とに分かれていたと指摘している。その中間に上原敬二を位置付け、上原を「国立公園の自然を利用することを単純に否定したり、一切の

人工的な手をくわえるべきではない」というような硬直的な主張をしているわけではない」と説明している³⁾。村串の特徴は国立公園論争を「自然保護」と「開発利用」とに分けているところである。

一方で、同じく国立公園成立期の論争を扱っている田中正大は軸足を「自然風景の利用」に置き、そのための風景保護と開発の対立に注目した⁴⁾。風景利用のために積極的に開発を進めようとした本多に対立する立場として上原敬二を挙げた。田中の説明では、上原の主張は「都会の生活から逃れて静かな原始的生活を欲する人は、かならずや『俗化しない土地』を望むであろう」というものであったが、この上原の主張も風景を楽しむ(利用する)ことを前提としていると言える。

田中は本多の主張について、風景利用のための開発によって自然が多少壊れても仕方がないというのは「割り切りすぎている」と指摘しつつ、実際には本多のこのような開発利用の論理が、わが国の国立公園整備の基礎となったと述べている。

村串や田中が共通して述べているように、本多の自然風景利用の考え方には、過激な部分が含まれていたが、自然風景を利用することは同時に自然風景を「資源」ととらえていたということでもある。

そこで本研究では、本多の風景利用策における個別の計画を整理した上で、本多自身が何を風景資源ととらえ、

それを生かすためにどのような空間改変を考えていたのかを明らかにすることを目的とする。

本多は日本内外で数多くの公園設計に携わるとともに、自然風景地や温泉などの観光地において風景利用を主眼とした「風景利用策」を提案している。本研究は本多の「風景利用策」を分析対象とする。

本多の風景利用思想に関しては、これまで様々な研究がなされている。手嶋・堀⁵⁾は、「日光一帯の山水風景利用策」の資料分析を行い、回遊の利便性および視対象の向上、風景の公衆への開放を通じて観光事業化する意図があったことを指摘している。また熊谷らによる本多静六の記事⁶⁾、渋谷による記事⁷⁾でも本多の風景利用策についての基本的な考え方について回遊路、運動施設、風致林による風景保育などがあったことが指摘されている。

これらは、本多の風景利用の考え方と方法について大枠で捉えているといえる。一方、本研究では、本多の提案した内容から、資源としての風景についての考え方、およびその利用のための具体的な空間改変の方法についても分析対象とする。

(2) 研究の方法

今回着目する本多が立案した風景利用策とは、郊外の自然風景地や温泉などの観光地の利用方法について林学の立場から提案した計画をまとめたもので、全部で17件立案されている¹⁾。これらを風景の対象ごとに分類したのが表-1である。本研究では、本多の自然風景地、観光地の利用策についての考え方を幅広くとらえるため、市街地の風景利用策を除いた4分類をカバーするよう以下の4冊を分析対象とした。

- ・すでに有名な観光拠点がある場所の風景利用策：「日光一帯の山水風景利用策」（1914年、以下「日光利用策」）
- ・海岸部の風景利用策：「日州青島ノ保護利用策」（1918年、以下「青島利用策」）
- ・山間部の川を中心とした風景利用策：「廣島縣備後國帝釈風景利用策」（1919年、以下「帝釈利用策」）
- ・温泉地の発展策：「大分縣速見郡由布院温泉發展策」（1924年、以下「由布院利用策」）

各風景利用策の立案の経緯に目を向けると、「日光利用策」に関して、日光東照宮は1914年に建立300年を迎え、その記念事業として東照宮が神苑新設の設計を本多に依頼した。これが日光利用策立案の直接の契機となっている⁵⁾。日光利用策では、神苑に対する意見のみならず、奥日光を含めた日光一帯の風景利用についても提案されている。本多は計8日程、2名の技師と庭師と共に日光一帯の実地調査を行い⁸⁾、その成果を1914年6月23日、日光東照宮社務所において当地の有力者に講演

表-1 本多の風景利用策等とその分類

	風景利用策等	所在地	土地の分類
1	日光の風景利用策	栃木県	山間部の川、既に観光地
2	伊香保温泉の新経営	群馬県	温泉
3	奥多摩風景利用策	東京都	山間部の川
4	箱根風景利用策	神奈川県	山間部、温泉、既に観光地
5	木曽の風景利用策	長野県	山間部の川
6	山之内温泉風景利用策	長野県	温泉
7	天竜峡風景利用策	長野県	山間部の川
8	日本ライン風景利用策	愛知県	山間部の川
9	温海温泉改良私見	山形県	温泉
10	村杉温泉風景利用策	新潟県	温泉
11	有馬温泉風景利用策	兵庫県	温泉
12	城崎温泉改良策	兵庫県	温泉
13	広島市の風景利用策	広島県	市街地
14	帝釈峡風景利用策	広島県	山間部の川
15	岩国風景利用策	山口県	市街地
16	湯布院温泉發展策	大分県	温泉
17	青島保護利用策	宮崎県	海岸部

した⁹⁾。その講演録が「日光一帯の山水風景利用策」である。

「青島利用策」の立案は、当時宮崎県知事であった堀内や宮崎郡長の小野原の依頼を受けた本多が、小野原郡長や田川県技師、当地の有志者の案内の下、3日間青島と対岸一帯の翠巒や名所、旧跡の調査を行ったことに始まる¹⁰⁾。この調査を踏まえ1918年3月に講演を行い、それが「日州青島ノ保護利用策」としてまとめられた。

「帝釈利用策」が立案された背景には、明治末から大正期にかけて帝釈天を祀る永明寺への参詣者の減少やそれに伴う町の衰退があった¹¹⁾。こうしたなか、広島県比婆郡帝釈村（現、庄原市東城町）の永明寺住職であった村上誠龍は、比婆郡役所と協議し帝釈保勝会を設立した。保勝会会長に就いた村上は、予て面識のあった本多に帝釈峡の風景利用について指導、調査を依頼し、本多は2日間に渡り、広島県技師の丹羽岩槌の案内の下、実地踏査を行った¹²⁾。1919年5月に、調査を踏まえた提案を「廣島縣備後國帝釋風景利用策」としてまとめ発行した。

最後に「由布院利用策」について、1924年10月11日に棉陰尋常高等小学校の講堂において、本多は「由布院温泉發展策」と題して講演を行った¹³⁾。講演では、ドイツの「バーデンバーデン」を念頭に由布院の利用について提言した。その講演が「大分縣速見郡由布院温泉發展策」としてまとめられた。

本研究は、まず2章において、上記4冊で提案されている計画案を計画対象ごとに分類し、それぞれの計画の計画意図について考察を行う。3章では2章の結果を踏まえて個別の計画の背後にあった考え方について整理し、それをもとに「資源としての風景」と「空間改変」の視点から考察する。

表-2 各風景利用策で提案された計画 (その1)

計画対象		日光	青島	湯布院	帝釈峽
道路	自動車道路	<ul style="list-style-type: none"> 日光より中禅寺及び湯本間は是非とも現在の道路を取り広げて自動車の交通を自由ならしめ 裏見瀧を廻って清瀧にて中禅寺街道に合する現在の道路を自動車道に改造するを要す 	<ul style="list-style-type: none"> 青島停車場前の設備としては道路をもつと広げて並木道を造り、現在の桜並木を補植し又は将来においてピロウの並木とすれば甚だ面白い 	<ul style="list-style-type: none"> 之(別府)との連絡をも容易にする必要があり 	<ul style="list-style-type: none"> 帝釈を中心として四周の風景を遊び楽しむに要する道路を開鑿して…
	歩道	<ul style="list-style-type: none"> 西の湖の奥の柳澤に赤岩瀧として未だ世に知られざる立派なる瀧ある由なれば…歩道をつける 裏見瀧の茶屋の上下の岩上を通る部分は其岩を切り込み自然的に足の路場の段を造ること 道を少しく修繕して健脚者の探勝に便すること 旧道と雖も其危険なところ丈塞ぎ…修繕して客をして新、旧任意の道を取らしむべし 	<ul style="list-style-type: none"> 城山一帯は登山回遊道路を設けて眺望の地とし 幅を一定にして置くの要なく 危険なる崖地には安全なる手摺を設けたらよい 勾配は出来るだけ緩に造り、止むを得ざる急坂は段々道となし 上り下りの多い道は改めて所々山腹に新たに作りあまり高低をつけない (青島)島の周囲一周する歩道を作ること、石多きところには石を三四尺幅に敷きならざる所は砂土にて 	<ul style="list-style-type: none"> (中廻遊道路) 自由に散歩が出来る位の道路を開きます (小廻遊道路) 各遊覧地を連絡 	<ul style="list-style-type: none"> 自然の地形に従ふて…景色のよい処よい処と廻り廻つてなるべく変化の多く遊覧に飽かぬように なるべく長く曲がった走蛇形に造るがよい (橋) 地勢に応じて施設 危険な処には必ず丈夫な而も風雅な手摺を作る必要 自然の経路の如く風溜を作ることが肝要 (帝釈殿前の橋) 改築の際は幾分技巧を凝らして帝釈殿に釣り合はしめ (洞窟内) 飛石を配して遊覧に便にし (洞窟までの坂道) 階段を設けること
自然物や風景としての人工物	滝や溪流	<ul style="list-style-type: none"> 裏見瀧は…大洪水に瀧口破損して…実際裏見の瀧にあらざる…瀧を裏より見得る如くなすこと 瀧口に瀧下より見えざる様に大岩石を川上より轉がしか…現在よりも更に前方に且つ幅廣く落さしむる如くなすべし 河水の七割を右の岸に誘ひ中島の大岩に奔流せしめて大瀑布となすこと 	-	<ul style="list-style-type: none"> (金鱗湖) 湖面の拡張、湖底の浚渫、湖畔の改良 	<ul style="list-style-type: none"> 溪流中の水量は小瀧や早瀬を作ることによって多量なる如く見せるよう施設するとともに流れに変化を与えることが肝要である 常に不潔物を除去する様に努むると同時に溪流を整理し流水の作用を以て自然に不潔物の停滞するを洗い流す方法を探る (星下池) 天然石を以て体裁よく築き上げ、人目に付かぬようセメント又は漆喰で水の通透せぬ様にする (湧水) 流路に当り壑状に穿ち、幾分の清水を常に流せるようにする
	植物	<ul style="list-style-type: none"> 現在ヒノキ其他の並木の無きところには落葉松の中木を植うこと 天然植物園となすこと…空地には日光地方に存する樹木にして此處に缺けるものを自然的に補植する (馬返し) 夏は日陰なくして暑きにより道の両側又は南側方に並木を作ること 磁石岩傍の大松は根部甚だしく露出して…土を根の隠れるまで即ち五寸位盛ること 植物園内の下草と笹とは年2回、六月末と八月末に刈り取る 湖辺雑草は時々刈り取りて奇麗なる草原となし其間には美しき野生の草花を播種栽培すること 樹の根元に…成るべく盛り土をなさざること 人為的に枯れたる枝は見悪きにより綺麗に伐り直すこと 両脇の空地に適當なる樹を植え 老木枯れかゝるにより今の内に後継者二三本を植え置くこと ツツジ類をも補植し置くこと 天然の風致林として森林美を發揮せしむること 瀧の北岸約二丁幅位は森林と為すこと 便所は隠蔽して植樹を以て隠すこと 	<ul style="list-style-type: none"> (青島) 現状を損ねざる範囲内に於て熱帯植物の増殖を計り (青島) 今日の林相を自然に拡大せしめる方法を講じなくてはならない 老樹名木は何れも其地の由緒深きを現し… 此地方に生息すべき樹種を補植 天然の林相、風土は之を適当に利用して益々其特徴を發揮せしめ 見透しをつける時には一切樹幹を伐採せずして枝のみを伐り透かし自然に枝の透間より見ゆる如くなすべし (防瀬林) 林内を整理し、其民家に接するところは常緑闊葉樹の下木を植栽し…民舎を隠蔽すること (防瀬林) 花卉を下草として植うる (防瀬林) 松の不足せる箇所には…大松を補植すること (防瀬林) 水際と松林との間を狭くし松林を拡大する 眺望に必要な所のみを所々刈込む (生田山) 天然植物園設置 正車坊に下る道路両側の雑木林は天然植物園となし 一帯の路傍にヤマザクラを主として次いでモミジ、ハゼなどの紅葉する樹を植える (便所) 周囲は常緑樹にて囲み… 	<ul style="list-style-type: none"> (自動車道)の両側には柿の木を植えて並木とする 紅葉の名所は前山から由布獄の天然林一帯となし…其他の路傍又は空地にはモミジを補植する 此地方に生息すべき樹種を補植 (亀山) 八合目までは桜七分、モミジ二分、松一分位の割合に植栽し、八合目以上は僅かに陽上になつて居る部分のみに松、桜の大木を植え (亀山) 北方の民林の八号目以上は木を切りすかして眺望を便にし、其の下方の民林中にも山桜を植えしめる 区有林一帯を風致禁伐林となし天然植物園に利用します ツツジ、サツキの名所は由布岳の上部一帯となし、天然生を保護し必要の所には補植すること ワラビ、ゼンマイの名所は四方の草山とする シメジ、ハツタケを各地の山に発生せしむる様にする ツバキ、サザンカの名所を作ること 道路にはなる可く並木を植え付け、夏期は日傘なしに歩けるようにすること、但し冬は費の当たるために落葉樹に限ること 便所は道の下に置き周囲を植えつつぶすこと 	<ul style="list-style-type: none"> 溪流中の水量は小瀧や早瀬を作ることによって多量なる如く見せるよう施設するとともに流れに変化を与えることが肝要である 常に不潔物を除去する様に努むると同時に溪流を整理し流水の作用を以て自然に不潔物の停滞するを洗い流す方法を探る (星下池) 天然石を以て体裁よく築き上げ、人目に付かぬようセメント又は漆喰で水の通透せぬ様にする (湧水) 流路に当り壑状に穿ち、幾分の清水を常に流せるようにする (道の曲がり角内部に) 灌木類を自然状に密植し、突っ切り道の出来ることを防ぐ (断崖溪附近) 楓樹を補植し、紅葉の名所たらしむる (石雲山頂) 自然的に樹枝を切り透して見透しを作る 石雲山一帯を天然植物園として設備すること (湧水附近) 殺風景であるから其附近一帯に常緑樹を補植し (青瀧附近) 樹木少く殺風景なれば其附近には常緑樹の杉、檜等を植えるがよい 桜は帝釈市場附近を主とし又一本堂附近にも植栽すること、ただし桜は山地に相応し且、自然なる山桜を主とするがよい (本堂附近) やまぶきも見られるから山吹の名所を兼ねしむること (星下池附近) ツツジの天然生が多いから之を刈り出し…補植してツツジの名所とすること 萩は鬼の供養塔附近に多きを以て之を刈り出し、楓萩を補植し萩の風景を顕すのである 現在の林相では色彩が単調に失うから所々に他の樹種即ちモミジ、山ザクラなどの花樹或いは紅葉樹を植栽して其の調和を保つと共に色を浮かす如くする 便所等は人目に付かぬ様に…
	人工物	<ul style="list-style-type: none"> 石燈籠を…歌ヶ濱の誘ひと爲すと同時に町より湖水を隔てて遠く見たる風景を添へる 一定の距離ごとに一定の形式の石灯籠を…社前東側の行小屋を清潔になすこと 石垣を修理し 龍崎龍像の牛舎は…立ち退かしむる 	<ul style="list-style-type: none"> 現在の茶店は適當の時期に改築して平屋建ての掛茶屋式になすべし (神社) 現在よりは大人らしめず…充実して堅牢なる式を探り質素にして四週を森林とよく調和せしむること 	<ul style="list-style-type: none"> 湖畔別荘は之を撤去 民家の景観 不潔物の見えざる様に植えつつぶし 	<ul style="list-style-type: none"> 現在の神社は粗末であるから修築するがよい 朝鮮式の高き細き石塔を建立し、帝釈市街地より樹間を透して隠見る様に設置し

なお本論で風景、自然風景というときには見る対象としてのそれを指し、風景地、自然風景地というときにはそういった風景が見られる地域を指すものとする。

2. 風景利用策の各計画にみる計画意図

(1) 計画案の分類

本章では、本多が日光利用策、青島利用策、由布院利用策、帝釈利用策で提案している計画案から本多の自然風景の利用における特性を明らかにするため、各風景利用策の計画案を計画対象ごとに分類した。計画対象は、以下の4つに分類される。

- ・道路：自動車道、歩道など
- ・自然物や風景としての人工物：植物や溪流など風景を

構成する自然や燈籠など

- ・新たな設備：腰掛けや四阿、橋、案内板、自然式水族館など
- ・経営などの仕組み：物理的対象ではなく、経営や宣伝、風景の維持などの仕組み

(2) 各計画対象の計画意図

本節では、計画対象ごとに計画を抜き出した。それを表にしたものが表-2、表-3 である^[2]。以下では、それにしたがって計画の意図について考察を行う。

a) 道路について

「道路」において移動手段について注目すると、自然風景地内外を自動車で移動するための「自動車道」と自然風景地内を遊覧者が歩いて移動するための「歩道」に

表-3 各風景利用策で提案された計画（その2）

計画対象		日光	青島	湯布院	帝釈峡
新たな設備	休憩設備	・茶屋其他風景眺望の佳なる所は何れも公共の無料休憩所となして茶及び布團を持来することを禁ず ・自然的の腰掛を置き休憩しつゝ湖上の眺望を恣にし ・清水の出るところあり…自然的水盤を置きて誘客の飲料、手洗水となすべし ・見晴台は公共の休息所とすること ・径一尺位の木を二つに挽き割り枕の上に横たえて腰掛けとなすこと ・弘法大師の一口水は…少しく道下に寄せ石を積みて自然的の小さき井となし	・（腰掛）クロマツ苗数本を補植し…日除木となしその下より眺望を恣にしむる方針を採る ・（四阿）堅固に造ること…休憩所又は雨の際雨宿りに必要なり ・（水の湧きでるところ）水呑み器を備え置くこと ・腰掛けは各回遊道路の諸所の眺望、急速に適する場所に置くこと、但し成るべく自然式のものを用ひ	・腰掛は眺望良き所、大木下、路傍の廣場、分岐點等に設ける ・四阿は台の上、又は将来は各山林遊歩道路半里位の位置に置く ・道端に茶屋を設けます	・道の広い処、眺望のよい処涼しい木の下、瀑布の附近等には腰掛けをつくる ・適當の位置の岩をよく洗つて尖つた所を目に付かぬだけに石屋に削らせておけば天然の石造腰掛けが至る処に得られる ・石雲山の頂きを長さ四間、幅三間程地均して腰掛けを置くこと ・（鞍掛山頂）平坦地を休憩場に当て尚ほ腰掛の設備をすることがよい
	遊覧設備	・分岐點には指導標を立て ・名所、舊蹟、遺物には其の由緒傳來を簡單に表示する ・歩道の兩側に存する樹木に各名札を附す ・頂上には小さき亭を造りパノラマ式の眺望圖を備へおく	・回遊案内圖を作り青島及び折生迫両停車場前に掲げ ・古墳は…由緒を録せる石碑を立て ・（三の台）安全堅牢なる四阿となし其の天井に直径五六尺大のパノラマ圖を張り付け…宮崎の地理を知り得る様にして置く ・（青島）樹種名を記したる小札を建て置く可し ・（天然植物園）名札はトタン板	・道傍の樹木に樹名を附し ・指道標の設置	・要所に大なる案内圖を掲げ…分岐点には必ず道指しを立て…案内者なしに見物し得るようにする ・（天然植物園）トタン板に樹名を記し ・（大盤石）天女の舞踏石と云うて居る…表札を建てて其の名と大きさを記すること
	行楽設備	・男體山には登り口の門に平常鍵を掛け何人にも登らせざるをも之を解放して自由に登らしむる ・ドンチャン場を造ること ・廣き運動場を造りテニスコートと設け ・競馬、自転車競争等を行ひ得る大運動場を造ること ・果樹園、花卉園等を造り一定の價格にて果實、花卉を販売せしむること ・乳牛場を設けしめ安価にて新鮮なる牛乳を販売せしむること ・冬期スケートの出来る位の氷の張るや否やを試験すること ・養魚池は一層之を開放して誘客の縦覧に供すること ・自然的釣堀を造り…釣魚は直に現場にて料理し食膳に上すするように其附近に茶店を造らせること ・出張所官舎の裏に道路より見通し得て宜しからざる…モミジ、ツガを生垣状に植えて之を防ぐこと ・河の下流まで遠く望見し得る様敷を中途より刈ること ・廻遊船会社を設け湖上に廻遊船を浮かべ	・青島對岸一帯の地は風光明媚にして…海水浴場又は遊園地として極めて適當 ・城山一帯の岩石地は養魚池、釣り堀、自然水族館等を設置するには適し ・小運動場を二ヶ所設け ・柑橘園としては…各柑橘に名札を附し…新鮮なる果實を売らしめる ・花卉園は…自由に縦覧ヲ許し希望者には花卉を販売せしむる ・（青島）参拝者名簿を置き任意に遺書の参拝者をして各生命、感想、詩歌或いは繪画等を興に任せて記入せしむべし ・大松下の空地は…小運動場を設けること…ぶらんこ、遊導木其の他の兒童用運動遊具を設置すること ・松林内の空地に…テニスコートを設けること ・松露採取場となし将来遊覧客ののみ採取せしむること ・松林外の一帯の砂礫には、はまぐり、あさり、の類を繁殖せしめ客の娛樂用に供す ・大運動場を置く…水盤と流し場とを設けて随意に手足等を洗はしめる ・音楽堂の位置を松林内に選定し置き…将来…音楽堂を作ること ・夏期講習会場は…将来松林内に完全なるものを作る	・（金鱗湖）特殊養魚場、植物園、或いは兒童の遊歩地、入浴場其他 ・地獄の湯を集めて湯川を作り、龜山温泉下の水田中に適當の地に游泳温泉場を作ります ・宮ノ原の一部に大競走場…中にテニスコートを設く、簡易野球場等を設け、将来は完全なる水泳競技場を作り ・動物が自然の生活状態にある如き動物園…之に附屬して茶屋を設け新鮮なる乳、卵等を売らしめること ・大運動場、養魚場、釣り堀、花卉園、果樹園、温室、鹿苑、子供の運動場、図書館、博物館、公會堂兼講習會場 ・銀鱈湖を利用し…養魚場をなす外、別に釣堀を設け一定の料金にて釣魚をなすしめ ・（果樹園を）龜山の南腹又は適當の地に設け…取立ての果物を売らしむること…花時の美観は一敷に之を公開し ・菊、菖蒲等各種の花卉も栽培して売らしめ ・（温室）現在の地獄を利用して温室栽培をなし冬間の花卉、野菜を販売し且つ遊覧に供すること ・若宮八幡の境内を奇麗にし水の活用に努め、且つ附近の杉山を整理し一帯を遊覧地に供せしむる	・将来境内前の民家四戸を取り除き河畔に、けやき、やまざくら、もみぢ等を植栽し広場となし置く事 ・（境内）小綺麗な茶亭を置くは可なり ・（境内）鉄棒、ぶらんこ等二三の運動具を設備するは親切なる方法なり ・水禽類、りす等を飼養教育するは更に面白い ・（帝釈殿附近の川）鯉を放ち参詣客が常に游泳する魚類を見得らるる如く保育すること
	経営などの仕組み	交通機関整備 維持管理 観光地経営 宣伝	・馬返し湯本間は現在の電車に連絡する乗合自動車を作るを要す ・保勝會を造り ・中禪寺湖畔の道路の南側には今後は新たに家を作らせざる事 ・中の茶屋より裏見瀧まで河の右岸一帯は已に土砂停止林として保安林に編入せられたるも左岸は未だ保安林ならざるが如し…保安林に編入するを要す ・将来外国人を誘致する為に大海水浴場の西方松林内に完備せるホテルを造り ・列車内に広告を設くること ・絵はがき、簡単な案内記を宮崎、大淀其他の停車場にて青島行きの旅客に切符と共に頒つ ・名物の發揮として遊覧客の土産を作る	・十二乃至十五人乗位の乗合自動車を通ずる時は ・保勝會 ・健康第一の文化生活に適合する温泉場となすやうな新式方針の下に諸設備をなす ・（案内圖）各大都市の停車場にて九州行きの旅客に無代配布せしめ ・名物の發揮	・保勝會を設立し ・沿岸の風景維持保存のため一帯に保安林に編入し ・（保安林にできないときは）兩岸の樹木は一切に伐採することなく必ず択伐すること ・案内圖の裏面を利用して「この辺りの草や花を取らないで下さい…」などと丁寧に注意すること ・帝釈峡付近一帯を禁猟区とし鳥獸を保護すること ・帝釈川の魚類を保護し其の増殖方法を講ずる ・温泉場をつくること ・将来来遊者の増加を慮り…ホテルを設くるの要がある ・実用的案内圖及び絵葉書を製し之を来客に配付する ・帝釈名物の登場

ついて計画されていた。また、自然風景地内に回遊線の設定を提案する計画も見られた。

本多は、帝釈利用策で自然風景地における道路の必要性を次の様に述べている。

「山水風景地ニ對スル交通機關ハ恰モ美術品ヲ納メタル寶庫ノ鍵ノ如クニ重要ナモノデ、如何ニ絶好絶美ナル山水風景アリト雖モ、道路ナクンバ宛モ是レ寶庫中ニ仕舞切りニナツテ居テ、出シテ見ルコトノ出来ナイ美術品モ同様デ、何ノ役ニモ立タナイ。」¹⁴⁾

つまり、本多は自然風景地に到達する道路があつて初めて自然風景の様子を鑑賞することが出来ると指摘し、「道路計画」を自然風景地における中心的計画と考えて

いたといえる。

i)自動車道

本多は自動車道について日光利用策で「第一期に造るべき小廻遊自動車道。」「第二期に造るべき大廻遊自動車道。」¹⁵⁾と題し、自動車道の回遊道路を計画した。回遊道路は、現に存在する重要な自然風景の要素を含む名所、社寺、観光地や将来観光地となりうる地域、主要駅を連絡するように設定されている。例えば日光利用策では、「中禪寺、湯本間の現在二間の道路を三間半乃至四間に取り擴げて自動車道と為すこと。」¹⁶⁾といい、奥日光への利便性を図っている。由布院利用策では、「直接別府に至る六里の現縣道を自動車用道路…（中略）…

所々に幅六七間の自動車廻しを作り」¹⁷⁾と、当時温泉地として賑わっていた別府との連絡を容易にするための計画を提案している。更に由布駅から由布院の温泉地一帯を自動車で回遊出来る大回遊道路の整備も提案している。

以上から「自動車道」は、周辺の観光地間を連絡し、回遊の利便性向上を目的としていたといえる。

ii) 歩道

本多は歩道について帝釈利用策で「帝釋ヲ中心トシテ周ノ山水風景ヲ遊ビ樂シムニ要スル道路ヲ開鑿シテ寶庫ノ中ヲ見セルヤウニセネバナラヌ。」¹⁸⁾といい、由布院利用策では、「中廻遊道路：自由に散歩が出来る位の道路を開きます。」¹⁹⁾「小廻遊道路：以上の（中廻遊道路で設定した歩道の一筆者註）道路間を連絡し又は各遊覧地を連絡するか又は各地便宜の地に無数に作るもの」¹⁹⁾と述べている。自動車で到達出来ない局所的な自然風景を遊覧するための道路として計画しているといえる。

歩道の設計については、「風致上カラ作ル道路デアツテ、遊覧地ナドノ人ノ散歩スルタメノ歩道ハ決シテ一定ノ幅ニスベキ必要ハナイ。」²⁰⁾「自然ノ地形ニ從フテ…（中略）…景色ノヨイ處ヨイ處ト廻リ廻ツテナルベク變化ノ多ク遊覧ニ飽カヌヤウニセネバナラヌ」²⁰⁾として、地勢に応じた変化に富む歩道を推奨している。こうした考えに基づき、大木や老松などの老樹銘木の附近や湧水の出る所など見所となる場所まで道を伸ばす計画を提案している。また、既に知られている場所だけでなく、まだ世に知られていない自然風景に至る道を新しく開鑿することも計画している。例えば日光利用策では、「西の湖の奥の柳澤に赤岩瀧とて未だ世に知られざる立派なる瀧ある由なれば戦場ヶ原より（約貳里）と千手ヶ原の船付とより（約一里半）歩道をつけること。」²⁰⁾として、知られていない瀧を遊覧客に紹介するために歩道の整備を提案している。このように、歩道は自然風景を眺めるための視点場としての要素があったといえる。

本多は歩道を整備するなかで、由布院を除く自然風景地において回遊線の設定を提案している（表-4）。回遊線についての定義は特にないが、自然風景地における局所的な名所を計画的に遊覧出来るように設定された具体的なルートのことであるといえる。帝釈利用策では、主に溪流に沿って回遊線を設定し、帝釈峡の特徴で考慮していると考えられる。帝釈峡の回遊線の最終地のうち雄橋、帝釈、帝釈殿は他の回遊線の出発地である。また温泉場が計画された帝釈や奇勝が残り、見どころの一つとされた犬瀬が最終地に設置されるなど、最終地から他の場所へ寄り道が出来るように設定している。つまり回遊線は地区内の名所を計画的に回遊し、最終地からの遊覧者の行動パターンに配慮して設定されたといえる。

以上から「歩道」は、周りの自然風景を楽しむための視点場としての要素を持ち、自然風景を遊覧客に紹介す

表-4 各風景利用策において計画された回遊線

風景利用策	回遊線
日光	日光橋→感満瀧→化地蔵→梵字岩→新設すべき釣橋→旧中禅寺街道
青島	【大回遊線】青島神社→青島一周→市中→釣堀→水族館→城山→天然植物園→愛宕山→塩谷ヶ平→青島停車場 【小回遊線】各局部に適宜設ける
帝釈	【第一回遊線】帝釈殿→奥の院→新設すべき朝鮮風の塔→天然植物園→御神山遥拝台→石雲山→天然植物園→本堂→寮の河原 【第二回遊線】帝釈殿→帝釈川→城ヶ端→白雲洞→唐門→鬼の供養塔→桂谷の岩壁→紅葉ヶ瀬→水晶瀧→佛石→雄橋→引き返す 【第三回遊線】雄橋→帝釈川→断魚溪→鳥越瀧→猿懸岩→八匹淵→霧分神→だらだら瀧→天女の化粧水→牛鬼淵→雄橋 【第四回遊線】帝釈、東城間里道→黄金峠→星下池→帝釈、東城間里道→弘法の御助水→天女の踏踏岩→寮の谷→鞍掛山→天女の井戸→帝釈殿に帰来 【第五回遊線】帝釈川→鬼の窟→藤巻の青渦、夏森の水透→帝釈 【第六回遊線】帝釈川→雄橋→神石群犬瀬
由布院	回遊線なし

るための手段として計画されたことが分かった。なかでも回遊線は、回遊した後の遊覧客の行動パターンまで考慮されていたと考えられる。

b) 自然物や風景としての人工物について

自然物や風景としての人工物の計画については、滝や溪流、灯籠、植物の整備が挙げられる。

i) 滝や溪流の整備

日光では裏見滝（現、日光三大名瀑の一つ）の整備を提案している。裏見滝は、「明治三十五年の大洪水に瀧口破損して宛も薬研の底の如く變じ今日にては實際裏見の瀧にあらざる」²¹⁾として、「瀧口に瀧下より見えざる様に大岩石を川上より轉がしかけ…（中略）…現在よりも更に前方に且つ幅廣く落さしむる如くなすべし」²¹⁾と、水流が幅広く前方に落ちるように再整備を提案している。人為的な整備方法であるが、遊覧客に迫力ある滝を楽しんでもらいたいという本多の意図がうかがえる。帝釈利用策では、「溪流中ノ水量ハ小瀧や早瀬ヲ作ルコトニ依ツテ多量ナル如ク見ユルヤウ施設スルト共ニ流レニ變化ヲ興ヘルコトガ肝要デアル。」²²⁾として、水の流れを意図的に変化させることで風景の演出を提案している。

以上から本多は、遊覧する楽しさをより増大させるために、滝や溪流の流れを意図的に変化させるなど自然風景に人の手を加える整備を計画していたと考えられる。

ii) 植物の整備

「植物」の整備において植物の利用目的について着目すると、以下の5つが計画されていることが分かった。それぞれについて以下に解説する。

- ・植物の特徴を発揮させて利用する「特徴の発揮」
- ・青島のピロウなど地方固有の植物を用いる「土地らしさの発揮」
- ・植物による「眺めの演出」
- ・沿道や展望所への植栽による「緑陰の創出」
- ・植物によって民家等を遮蔽する「目隠し」

イ)特徴の發揮

本多は青島利用策において、「天然ノ林相、風土ハ之ヲ適當ニ利用シテ益々其特徴ヲ發揮セシメ現存セルモノヲ補足シ或ハ助長セシムルノ大方針ヲ採ル可キ」「各名所ニハ其名木ト同時ニ他ノ花木ヲ一二分位ヅ、混植スルノ方針ヲ採ル可キ」²³⁾と述べている。このように、植物の特徴を發揮させることで、自然風景地に紅葉、桜などの名所を造ることを計画している。また、植物の特徴を機能的に利用する計画も提案している。例えば「島ノ西北方面ノびらう林ノ外側ニくろまつノ苗ヲ數十本補植シ將來びらうノ防風用トナス可シ」²³⁾と、塩害に強い黒松により、防風機能をもたせることを提案していた。

植物の保護について着目すると「見事ニ苔蒸シタ岩ガアツテ上ニツゞじガ咲イテ居ルト云フ如キ大切ナ處ハナルベクソノマヽニシ」²⁴⁾「卍字岩上のアヲハダの木の傍にはモミヂニ、三株を植ゑて風致を添ふると共に後日アヲハダの枯れたる時の後繼となす事」²⁴⁾と、苔の蒸した岩の上に咲くツツジや卍字岩という奇岩の上に咲くアヲハダと、本多は絵になるような植物を保護の対象として考えていたと思われる。

このように人に見せるために植物を保護するという考え方、また新たに植物を植える際には、もとある植物の作る風景の特徴をより強調するようにするという考え方があったといえる。

ロ)土地らしさの發揮

本多は老樹名木について「其地方ニ於ケル老樹名木ハ啻ニ其地方ノ風致風教上、將タ學術上等ニ大利益アルノミナラズマタ實ニ偉大ナル帝國ノ建設上ニ必要缺クカラザルモノデアル」²⁵⁾といい、歩道を整備する際に老樹名木を遊覧出来るように計画している。また、本多は天然植物園を計画している。天然植物園について由布院利用策では「此地方に生息すべき樹種を補植します。」²⁶⁾と述べ、地方固有植物の利用を提案している。また、青島利用策では、「斯ノ様ナ天然式植物園ハ最モヨク天然ノ生長状態ヲ記憶セシメ一般人ニ正確ナル名稱ヲ覺エシムルノミナラズ、兒童、學生ノ教育上極メテ必要デアルカラ」²⁷⁾と、植物園を教育の場として計画している。

このように地方固有植物を利用することは単に風致を添えるだけでなく、その土地らしさを助長する効果があり児童や学生に対する郷土教育の効果も意図されていた。

ハ)眺めの演出

植物の整備のひとつに「見透かし」の計画がある。見透かしについて「見透シヲツケル時ニハ一切樹幹ハ伐採セズシテ枝ノミヲ伐リ透カシ自然ニ枝ノ透間ヨリ見ユル如クナスベシ、但シ枝ノ切口ノ見ユル如ク切り込ミ或ハ一樣ニ見透シヲツケルハ不可ナリ」²⁸⁾と述べている。この整備手法によって帝釈利用策では、「遙拜台ノ前面ハ樹木繁茂シ、眺望十分ナラザルヲ以テ自然的ニ樹枝ヲ切

リ透シテ見透シヲ作ルコト。」²⁹⁾と計画している。このように、見透かしによって開けた眺めとは異なる、枝の透間から望む眺めを演出している。この計画は、先述の（イ）（ロ）で示したような見る対象としての植物の利用ではなく、視点場の整備であると言える。「道路計画」において、地勢に応じた変化に富む歩道を提案したように、眺める方法にも変化をつけて、遊覧する楽しさを増進させようとしていると考えられる。

ニ)緑陰の創出

植物によって風景をつくる以外に「緑陰の創出」がある。例えば日光利用策では「夏は暑きにより道の両側又は南側丈に並木を作ること」³⁰⁾と述べている。湯布院利用策でも同様の計画を提案している。また青島利用策では眺望の得られるところの腰掛け近くに日除けのためのクロマツを植える計画を提案している。このように、遊覧客の遊覧しやすさを目的とした植物の使い方もあった。

青島利用策において、防潮林内に散策路を計画した際、近くにある民家が見えないように常緑闊葉樹の下木を植えることを提案している。また全ての利用策で便所の計画をしているが、これも常緑樹等で見えないようにすることを提案している。これらは、本多が自然風景を毀損すると考えたものを目隠し、その場の雰囲気を持続することを意図した提案であるといえる。

iii)人工物

人工物の整備において、その目的について着目すると、以下の2つに分けられることが分かった。

- ・添景としての「風景の向上」
- ・建物の改修など「風景の改善」

イ)風景の向上

日光利用策では、「現在ニ荒神社の庭に捨てある石燈籠をも此處に運びて適宜の位置に立て歌ヶ濱の誘ひと爲すと同時に町より湖水を隔て、遠く見たる風景を添へること。」³¹⁾と述べている。また、帝釈利用策では、石塔を復旧することを提案し、「帝釋市街地ヨリ樹間ヲ透シテ隱見スル様ニ設置シ」³²⁾と述べている。これらは、その場所の自然風景の魅力を増進させる添景としての要素を含んでいるといえる。つまり本多は人工物を用いることで自然風景の魅力を増進させることを期待していたといえる。

ロ)風景の改善

帝釈峡利用策では「現在ノ社祠ハ粗末であるから修築スルガヨイ」³³⁾と述べ、日光利用策では「社前東側の行小屋を清潔になす事」³⁴⁾と述べている。その場の美しさを害するものを改善していこうという意図がうかがえる。また青島利用策では「現在ノ茶店ハ適當ノ時期ニ改築シテ平屋建ノ掛茶屋式ニナスベシコレ高キ家ハ樹林ヲ低ク見セシメ且神社ノ尊嚴ヲ害ヘバナリ」³⁵⁾と述べている。

風景の主角を神社や自然風景であるにとらえており、それを脅かす建物を改善したいという意図であるといえる。

c) 新たな設備について

新たに計画している設備の利用目的について着目すると、以下の3つが計画されていることが分かった。

- ・腰掛けや四阿などの「休憩設備」
- ・橋や指導標、山頂のパノラマ図設置など遊覧者の遊覧を助け、自然風景の楽しみ方を提供する「遊覧設備」
- ・釣堀、遊泳温泉場など行楽に供する「行楽設備」

i) 休憩設備

本多は各所に腰掛の設置を計画している。腰掛の設置について「山ニ登ツテモ憩ウ可キ腰掛モ無カタナラバ到底遊覧客ヲ招致スルコトハ出来ナイ」³⁶⁾と述べ、腰掛を遊覧客の休憩場所として提案していた。設置場所については、「道ノ廣イ處、眺望ノ好イ處又ハ涼シイ木ノ下、瀑布ノ附近等ニハ腰掛ヲ造ル。コノ腰掛モナルベク自然的ノモノヲ以テ造ルノガ面白イ。」³⁷⁾と述べ、日光利用策では、「自然的の腰掛を置き休憩しつゝ湖上の眺望を恣にし」³⁸⁾と計画している。このように、休憩用としてだけでなく、自然風景を眺めるための視点場としての機能も期待されていたといえる。また、本多は茶屋の前に置かれた有料の腰掛に代わるものとして、無料腰掛の設置を提案している。本多はそれについて「華嚴の瀧見茶屋は瀧の見ゆる所一面に座布團を敷ける腰掛を並べあり、偶々腰を下ろして悠々眺めんとするも茶代を食らるゝを慮れ不愉快を感じずが故に其眺望の最も良き處には相當の無料腰掛を置き公衆の便を圖ること。」³⁹⁾と述べている。当時、茶屋の前には有料の腰掛が設置され自然風景の視点場を独占していた。本多はこれに反対し、有料の腰掛に代わる無料腰掛を据えることで、自然風景の遊覧客への開放を要求している。

以上から腰掛けなどの休憩設備は、単に休憩設備としてだけでなく、自然風景を眺めるために一般に開かれた視点場の整備を意図して計画されたといえる。

ii) 遊覧設備

遊覧客の遊覧の手助けとなる指導標や案内図の整備が計画されている。「何町何間先ニハ眺メヨキ處アリ」⁴⁰⁾と記し、なかには見物するべき場所を載せた回遊案内図を添える計画も見られた。また、名所、旧跡にはその由緒伝来を表示する立て札を設置する計画も提案している。天然植物園では、園内歩道の両側にある樹木に名札を設けることを推奨している。

青島利用策では、満潮時に海水が流れ込むようにした自然式水族館をつくり、そこに魚の絵と名前を示した札を立てることを提案している⁴¹⁾。これら指導標や立て札の設置は遊覧者の利便性や興味の促進を図っているものであると考えられる。

青島利用策では、青島の城山の頂上に四阿が計画され

ていた。その四阿には、「此圖ト實際ノ景トヲ照シ合セテ自由ニ宮崎ノ地理ヲ知り得ル様ニシテ置クノデアル、是レハ一般登覧客ノ趣味ヲ喚起スルノハ勿論デ又小學、中學ノ生徒ニハ教育上有益ナルコトヲ思ヒマス」⁴²⁾と述べ、青島周辺の地理を知ることが出来るようにパノラマ図の設置を提案している。天然植物園と同様に、児童の学び場として提案するなど自然風景を単に楽しむだけに終始させない自然風景の新たな利用方法を提示しているといえる。

以上から「遊覧設備」は、山水風景地らしさを表す旧跡や天然植物園、地理について理解を深め、魅力を引き立てる機能を期待されていたといえる。

iii) 行楽設備

自然風景地の地勢を活かして、日光では登山、青島では海を利用し釣堀、自然式水族館や海水浴を、由布院では温泉を利用し遊泳温泉場を計画するなど、山水風景地の地勢を活かした行楽のための設備を提案している。その他テニスコートやスケートなどのスポーツ施設、花卉や野菜、果物、牛乳の販売所なども提案している。都会の人が自然の多いところに訪れた際に感じる健康、新鮮といったイメージの具現化であるといえよう。自然風景地の特徴ある地形や自然のイメージを利用し、レクリエーション要素が強い設備を計画することで、民衆にとってより魅力のある観光地を作ろうとしていたと言える。

d) 経営などの仕組みについて

経営などの仕組みにおいて、その目的について着目すると、以下の4つが計画されていることが分かった。

- ・自然風景地に人を誘致するための「交通機関整備」
- ・保勝会の設置や規制などの「維持管理」
- ・宿泊施設など観光地としての整備である「観光地経営」
- ・案内図配布や土産、名物の開発を行う風景地の「宣伝」

i) 交通機関整備

本多は自然風景地に至る交通機関について「昨年南洋視察の結果電車及び汽車は最早今日は時世遅れにして將來は山水風景の交通機關は出來得る限り自動車道と爲さざるべからざる」⁴³⁾と述べている。自然風景地を訪れるための交通機関は、将来の自動車普及を見通して自動車の利用を提案し、由布院や日光では、乗合自動車の整備を計画している。また、自動車の他に汽車についても「汽車ノ割引ヲナスコトヲ殊ニ定期乗車券、團體割引ヲ極端ニ廉ニシ官線ト輕便線トノ連絡切符ヲ作り、官線ノ大停車場内並ニ列車内ニ廣告ヲ設クルコト」⁴⁴⁾と述べ、来訪者の誘致を図っている。

乗り合い自動車や割引切符の発売など、来訪者の誘致を図る「交通機関整備」からは、自然風景を利用する為の手段と機会を広く一般市民に提供するための手段であ

ったといえる。

ii)維持管理

自然風景地の「維持管理」では、全ての風景利用策において保勝会の設置が計画されている。本多は日光の保勝会について「日光各社寺の首腦者、日光地方有力者、縣當局者等主となり日本の有力家並に専門家の賛助を得て保勝會を造り技術家を囑托して風景設備に關することは一切其専門技術員の立案により本會の議決を経て實行する事。」⁴⁵⁾と説明している。帝釈利用策では、保勝会について「役員ハ時折巡迴シテ風景地ノ手入、保存ノ完全ヲ期スルコト。」⁴⁶⁾と述べ、地域内外の有力者に加え風景整備に関する知識をもった専門家を交えた維持管理体制を提案していた。

自然風景地の土地の管理に着目すると、青島利用策では、「遊覽ニ適スル風景佳ナル場所ハ全部公有トナシ置キ決シテ個人ニ所有セシメザルコトデアリマス」⁴⁷⁾という。東海道の大磯町で景勝地が全て富豪の所有になってしまい、「一般ノ遊覽客ハ荒寥タル街ノ塵芥ノ中ヤ或ハ狭イ熱イ砂濱ヲ散策スル位ノモノデ遊覽スル場所モ無クナリ一般ノ客ハ著シク其数ヲ減ジタ」⁴⁸⁾と説明し、民衆が良い風景を享受し続けられるように公有化を提案している。

また「城山一帯ノ用地（臺上及ビ道敷共）竝ニ稻荷山ヨリ大作山ニ通ズル道敷及ビ眺望、休憩ニ適スル臺地ハ總テ先ヅ改良前ニ公有ニナシ置クヲ要スルノデ然ラザレバ此等ノ整備（眺望の良い場所への展望台設置とそこへ至る道の整備―筆者註）ノ完成ハ中々困難ノコトダト思フ」⁴⁹⁾と、空間整備前に土地を公有化しておくことを指示している。このように、本多は有力者や専門家で維持し、それを広く民衆に開放するという構図を描いていた。

iii)観光地経営

各利用策において、山水風景地にホテルや温泉宿などの宿泊施設を計画している。帝釈利用策では、「將來來遊者ノ増加ヲ慮リ帝釋ニ稍ヤ完備セルほてるヲ設クルノ要ガアル。」⁵⁰⁾と述べ、青島利用策では、外国人の誘致を考慮し、自然風景地における宿泊施設の必要性を述べている。自然風景地を観光資源とし、経営に結びつける考えも持っていたといえる。

iv)宣伝

風景地の「宣伝」として、案内図や絵葉書の配布を計画している。案内図とは滞在日数別に自然風景地の見物場所や費用の大略を示した旅行のモデルプランのようなものである。絵葉書には自然風景が描かれている。これらは大都市の主要駅などで配布を提案されている。例えば由布院利用策では、門司や久留米、別府等、風景地に通じる拠点となる駅で無料配布することを計画している。また、各所では名物や土産の開発にも力を入れている。本多は名物や土産に、その土地の名前を付けることを推

表-5 各計画の意図と考え方の関係

計画対象	計画	考え方	a)	b)	c)	d)
道路	自動車道	・周辺の観光地間を連絡し、回遊の利便性向上を図る	○			
	歩道	・知られざる風景を紹介する ・風景を眺める視点場とする ・移動の利便性向上を図る	○		○ ○	○ ○
自然物や風景としての人工物	滝や溪流	・遊覧する楽しさを増大させる			○	
	植物	・もとある植物のつくる風景の特徴をより強調する ・その土地らしさを強調し、鑑賞、教育に使う ・眺める方法に変化をつけ遊覧の楽しさを増進する ・緑陰をつくり、遊覧しやすくする ・民家等を目隠しし、その場の雰囲気維持する		○	○ ○ ○	○ ○
	人工物	・添景として、自然風景の魅力を増進させる ・建物を改修するなどし、風景を改善させる			○ ○	
新たな設備	休憩設備	・休憩施設として、遊覧の助けとする ・良好な眺望の視点場とする ・無料にして、良好な視点場を一般に開放する	○ ○		○	
	遊覧設備	・橋や柵などを用い、遊覧者の安全を図る ・遊覧者の興味や教育の助けとする	○			○
	行楽設備	・特徴ある地形等を利用し、魅力ある観光地をつくる		○		
経営などの仕組み	交通機関	・自然風景を利用するための手段と機会を提供する	○	○		
	維持管理	・自然風景を維持しつづける仕組みをつくる ・民衆が自然風景を利用し続けられるようにする	○		○ ○	
	観光地経営	・自然風景を観光資源とし、経営に結びつける		○		
	宣伝	・自然風景地のイメージの定着化を図る ・自然風景地外で宣伝し人々を呼び込む		○ ○	○ ○	○

奨している。例えば帝釈羊羹、中禅寺のモチヂ饅頭といった具合である。更に青島利用策では、青島特有の植物であるビロウを用いたビロウ細工の土産を提案している。

このように、風景地の「宣伝」では、風景地のイメージの定着化を図ろうとしていたこと、風景地外で宣伝し、人々を風景地に呼び込もうとしていたことがわかる。

3. 本多の自然風景の利用に対する考え方

前章では、各風景利用策において「道路」、「自然物や遺物」、「新たな設備」、「経営などの仕組み」の計画対象ごとに、提案された計画の意図を整理した。本章ではそれをもとに個別の計画の背景にあった考え方を整理し、それについて「資源としての風景」と「空間変化」の視点から考察する。

(1) 個別の計画の背景となる考え方

前章で分析・考察した個別の計画に見られた考え方は、風景の利用という観点から見ると大きく以下の4つに分けられると考えられる。それぞれの計画と以下の4つの考え方について、順次説明を加える。表-5は、4つの考え方と2章で整理した個別の計画に対する考え方の主な関係をまとめたものである。

- 自然風景や風景地を民衆に開放する
- 自然風景地に民衆を呼び込む
- 自然風景そのものを演出する
- 自然風景の特徴や土地の魅力を伝える

a) 「自然風景や風景地を民衆に開放する」

1章で引用した田中の指摘にあるように「誰もが気軽にに行けるようにすること」は、本多の風景利用の考え方の根幹にあったことが知られている。個別の計画を見ても、到達の利便性や回遊の利便性を考えて設定された自動車道の計画は、手軽に民衆でも行けることを目指した計画であったと言え、汽車や乗合自動車の計画、その割引切符の発売も民衆が手軽に行けることを目指しているといえる。また、風景地内での移動に際し、移動の利便性向上を図っていると思われる歩道の設定や橋や柵、無料休憩施設などの整備も、背景には風景の民衆への開放があると考えられる。

b) 「自然風景地に民衆を呼び込む」

汽車の割引切符や車内の広告、案内図等の自然風景地外での配布、レクリエーション要素の強い観光施設の整備、観光地の経営などは、上記の自然風景地の民衆への開放よりも更に積極的に民衆を風景地に呼び込もうという考えに基づいていると考えられる。

c) 「自然風景そのものを演出する」

本多の提案した計画のうち、滝の形を変え水の流れを変える計画、紅葉の名所をつくる計画、その土地特有の植物を補植する計画、石灯籠などで風景を演出する計画、見栄えの悪い社祠を改築するなどは、いずれも風景に手を加える方法であるが、無かった風景を新たに作るのではなく、そこの土地の特徴を強調・発揮させようという考え方がベースにあるといえる。また見透かしをつかって風景の見え方を操作する計画や、風景の良いところまで歩道を延ばす計画、眺望の良いところに腰掛けや四阿をつくって風景を見せようという計画は、そこの土地にある風景を「紹介し見せる」という方法で、土地の特徴を強調・発揮させようという考え方であると思われる。

d) 「山水風景地の特徴や土地の魅力を伝える」

知られざる風景や良い風景を紹介するような歩行ルートの設定、老樹名木に名札をつける計画、天然植物園で植物の名前が分かるようにする立て札の計画、周辺の地理が分かるようにしたパノラマ図などは、自然風景地の特徴や土地の魅力を伝えるという考えによるとと思われる。

(2) 資源としての風景と空間改変に関する考察

本節では、(1)で出てきた考え方をもとに、何を風景資源と見ていたのか、その資源を生かすための空間改変はいかなるものであったかを考察する。

a) 「山水風景や風景地を民衆に開放する」

風景利用策を見ると、いずれの風景利用策においても自動車道路の計画がある。自動車道路にも廻遊線という名称がつけられ、また日光利用策では自動車道路から「眺望を恣にし」という表現もあるため、風景地へのアクセスのみではなく風景地内の廻遊も考えていたと考え

られる。そのためここでは風景資源を風景地全体の風景ととらえているといえる。しかしその自動車道路の作り方については幅を決めているのみで、自動車道路が与えるであろう風景への影響やそれをふまえてどのように風景のなかに位置付けるかということには言及していない。

一方で、風景地内の見どころを細かくまわるよう設計された歩道に関しては、例えば帝釈峡利用策で「歩道は決して一定の幅にすべき必要はない。強いてやろうとすると自然岩を切り取り風致を損傷する等の恐れがある」や、「自然の地形に従うて」つくるようになどと述べ、風景の一部になるように考えていたことがわかる。本多にとって徒歩で回るような場所は資源としての風景であったといえよう。ただし、崖など危険な場所に設けるとした柵は「丈夫な而も風雅な手摺（帝釈峡利用策）」「安全なる手摺（青島利用策）」と述べ、風景に馴染ませることはあまり考えられていない。柵をつけなくてもよい場所に歩道をつけるという考えも出てこないため、風景の保護よりも民衆への開放が上位の目的であったと考えられる。

b) 「山水風景地に民衆を呼び込む」

自然風景地に民衆を呼び込む際に絵葉書などを作成したが、これは自然風景地のイメージを定着させようとするものであり、この意味で絵葉書に使われたような風景は資源と考えられていたといえる。しかしながら風景地内にテニスコートなどレクリエーション要素の強い施設の整備については、必ずしも周辺の風景との調和が考えられていたわけではない。2章で指摘したように、都会の人が思う自然のイメージを活用した施設であったといえる。つまり自然風景そのものよりは自然というイメージあるいは雰囲気や資源をとらえていたと考えられる。

c) 「自然風景そのものを演出する」

瀧の形を改変したり樹木を補植したりして空間を改変し、自然風景そのものを演出する方法は、先に述べたように、そこの土地の特徴を強調・発揮させようという考えがベースにあるといえる。ここでは、目の前にある「ありのまま」の風景ではなく、その風景の特徴にしたがって本多自身が「こうあるべき」と思う理想像が風景資源と考えられているといえる。この場合、空間改変については、折り合いをつけるというよりは、理想追求のためにどの程度まで手を入れるかということになる。補植のような軽微なものから、天然植物園において「そこにあるべき植物」を植えるといったもの、瀧口の作り替えといった大きな工事を要するものまで様々であった。

一方、眺望の良いところに腰掛けや四阿をつくって風景を見せようという計画については、眺望できる風景を資源ととらえていると言えるが、そのための視点場整備では、山頂の地均しをして腰掛けを置く（帝釈峡利用策）、堅牢な四阿をつくる（青島利用策）など、比較的

大きな空間改変をすることにしており、それが山頂であっても視点場自体はあまり風景資源とは考えられていなかったと推測できる。遊歩道を風景の一部ととらえ自然的につくるとしていただのと矛盾する部分である。

d) 「山水風景地の特徴や土地の魅力を伝える」

これに該当する計画は、現在ある風景を資源ととらえていると考えられる。そのため、資源とされる風景そのものには手を加えず、それらを紹介するための整備が空間改変として挙げられる。

4. まとめ

本研究では本多の風景利用策における個別の計画を整理した上で、本多自身が何を風景資源ととらえ、それを生かすためにどのような空間改変を考えていたのかを分析した。その結果、以下の3点が明らかとなった。

- (1) 本多の風景利用策における各計画の背後には「自然風景や風景地を民衆に開放する」「自然風景地に民衆を呼び込む」「自然風景そのものを演出する」「自然風景の特徴や土地の魅力を伝える」という4つの考えがあった。
- (2) 本多の考える風景資源は、風景地全体のイメージ、風景地内部の眺め、その土地の特徴を良くあらわす植物や地形などのほか、本多自身が「こうあるべき」と思う理想像の場合もあった。
- (3) こうした風景資源を見せる、楽しませるための空間改変については、例えば眺望を楽しむために設ける腰掛けや広場が、風景地の重要な場所にあるにもかかわらず、それ自体が風景資源として考えられていないなど、風景資源と空間改変という視点から見れば相互に矛盾する部分もあった。

補注

- [1] 菖蒲町「本多静六博士を記念する会」が編集発行する「本多静六通信」第10号 p.59の公園一覧のうち風景利用策や温泉地の発展策は17件である。
- [2] 各風景利用策から網羅的に計画を抜き出すことを原則としたが、紙面の都合上、同一利用策内に重複するものについては省略した。ただし日光利用策の神苑の計画は対象としていない。

参考文献

- 1) 篠原修編：景観用語事典，pp.148-153，彰国社，2007.
- 2) 堀繁：わが国の国立公園の計画管理の実態とその変遷に関する研究，ランドスケープ研究，Vol.59, No.2, pp.85-92, 1995.
- 3) 村串仁三郎：国立公園成立史の研究，pp.60-69，法政大学出版局，2005.
- 4) 田中正大：日本の自然公園，pp.134-139，相模選書，1981.

- 5) 手嶋潤一，堀繁：「日光一帯の山水風景利用策」(大正3年)における本多静六の風景地計画に関する研究，都市計画論文集，No.29, pp.343-348, 1994.
- 6) 熊谷洋一，下村彰男，小野良平：マルチオピニオンリーダー 本多静六 日比谷公園の設計から風景の開放へ，日本造園学会誌，Vol.58, No.4, pp.349-352, 1995.
- 7) 渋谷克美：公園設計の特色，本多静六通信，第10号，p.58，本多静六博士を記念する会，1998.
- 8) 本多静六：日光一帯の山水風景利用策，pp.1-2, 1914.
- 9) 前掲8) p.30
- 10) 本多静六：日州青島ノ保護利用策，p.1，宮崎郡，1918.
- 11) 東城町史編纂委員会：東城町史 第6巻近代現代通史編，p.395，東城町，1997.
- 12) 本多静六：廣島縣備後國帝釋風景利用策，pp.4-5，帝釋保勝，1919.
- 13) 木谷文弘：由布院の小さな奇跡，p.132，新潮新書，2004.
- 14) 前掲12) p.8
- 15) 前掲8) p.3
- 16) 前掲8) p.21
- 17) 本多静六：大分縣速見郡由布院温泉發展策，p.17, 1924.
- 18) 前掲12) p.9
- 19) 前掲17) pp.18-19
- 20) 前掲12) pp.9-10
- 21) 前掲8) pp.16-22
- 22) 前掲12) p.15
- 23) 前掲10) pp.20-22
- 24) 前掲12) pp.9-12
- 25) 前掲10) p.15
- 26) 前掲17) p.21
- 27) 前掲10) p.45
- 28) 前掲10) p.49
- 29) 前掲12) p.19
- 30) 前掲8) p.17
- 31) 前掲8) p.20
- 32) 前掲12) p.16
- 33) 前掲12) p.22
- 34) 前掲8) p.20
- 35) 前掲10) p.24
- 36) 前掲10) p.18
- 37) 前掲12) p.11
- 38) 前掲8) p.20
- 39) 前掲8) p.18
- 40) 前掲12) p.30
- 41) 前掲10) p.41
- 42) 前掲10) p.44
- 43) 前掲8) p.23
- 44) 前掲10) p.47
- 45) 前掲8) p.29
- 46) 前掲12) p.29
- 47) 前掲10) p.20
- 48) 前掲10) p.21
- 49) 前掲10) p.42
- 50) 前掲12) p.30

(2010.9.8 受付)

HONDA'S IDEA ABOUT THE UTILIZATION OF NATURAL SCENERY ON "THE USE OF SCENIC LANDSCAPES"

Toru OGAWA and Junko SANADA

Essentially, natural scenery area plan must include scenery conservation and utilization as well as natural conservation, actually however, it is said that natural scenery area plan leans much toward natural conservation. So this study aims to focus on Seiroku Honda who has a major thinking about "utilization of scenery" in the Japanese national park's formation stage and clarify Honda's idea about the utilization of natural scenery by analyzing his "the Use of Scenic Landscapes". As a result, following three points are clarified. 1) Honda has four ideas in the base of each plans. 2) scenic landscape as resources in Honda's own ideas. 3) there was some conflict between modification ways and landscape resources.